

井
一思
親
閣

つらつら高祖日蓮大聖人様の御一代の御化導の次第を案じたてまつるに、主師親の三徳を光顕して、此の世間に倫道を示し、遠くは極果無漏の聖境に信敬帰依の宗旨を説かせ給う。

国主の恩を報ぜんがために、立正安国論を作つて諫言の鼓を撃ち、師匠の恩を報ぜんがために報恩鈔を撰み、追善を営み、父母の恩を報ぜんがために、身延山頂九ヶ年の間望郷の涙を瀝がせ給いぬ。

伊豆の伊東の三ヶ年の御流罪に、たとえ涙無き人も、東条の松原の刀杖の御法難に、たとえ涙無き人も、瀬竜の口の頸の座に、たとえ涙無き人も、佐渡ヶ島の塚原三昧堂の四ヶ年の御艱難に、たとえ涙無き人も、六十を越えさせ給うまで、父母の墓を拝まんとて五十町の峻を攀じさせ給える、御孝養の御心情を拝し、何人か誰か涙無きことを得ん。

竜の口の途すがら「日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず」と、末後の一句に平生堪えたる万般の苦を吐き給う。塚原の雪の中にて「今一度、父母の墓を見る身ともなりなん」と、思いを焦させ給いけり。山にしては、「東の方とし云えば、吹く風にも庭に降り立ちて肌えに触れて懐いを慰む。」とぞ仰せられ、乳を慕う心、そのままにして父母を慕い、御墓を慕い、み空のかなたを慕わせ給いぬ。天然の真情、仏に倣ひて「思親閣」と称す。けだし高祖日蓮大聖人の面目にして、また法華經の肝心なるべし。

海外伝導の御暇乞いを兼ねて、悲母行阿院日蘇大法尼の御遺骨を負うて身延に詣でぬ。武井坊の小松法師の内野日蓮師、従来憐愍せさせ給えるが、さすがに遷化の後間も無き悲母の遺骨を内地に蔵めて、孫に渡り、妙法蓮華經の五字七字を弘めんがために、赤脚死地に就く身の心中を不便と思いやらせ給いて、かつて、身延山頂思親閣の大広庭に起塔供養せしめ給いぬ。

#1-1